



スタイリッシュ・カリズマ

第二回

チャールズ二世と衣服革命

中野香織=文
by Nakano Kaori

男性服の歴史において、1666年10月7日は、ある革命が起きた日ということになっている。この日をスーツの基本型誕生の日と位置づける服飾史家もいる。

現代の感覚では、ファッションがある特定の日付以降がらりと変わるということとしたい、にわかには信じがたいのだけれど、そこはまだ国王の仰せが絶大な威力をもった時代だ。実はこの日、当時のイギリス国王チャールズ二世(1630~1685)がこんな服装改革宣言をしたのである——「世は新しい衣装一式を採用することにした。この衣装は、もう変えることはない」。

こんな風に日付が特定できるのは、当時の一平凡若手官僚にして希代の筆まめ男、サミュエル・ピーブス(1633~1703)が日記をごまごまと記し続けてくれたためである。彼の残した膨大な量の日記は、中流市民の日常的かつ形而下の事柄に関する赤裸々な記録(妻に見られると困る部分は暗号で書かれていたりする)であり、服飾史家にとっても貴重な一次資料。ピーブスの日記そのものに関しては、入門書として白田昭「ピーブス氏の秘められた日記」(岩波新書)を一読することをお勧めするとどめるとして、今回は彼の残した記録を頼りに、チャールズ二世による服装改革の実態に迫ってみたい。

17世紀前半のメンズ・ファッション

チャールズ二世が仰々しい決意の言葉とともに採用した問題の1666年の衣服であるが、いったいどんな点で革命的であったのだろうか。これを考えるにあたって、前回概観した16世紀以降、チャールズの「改革宣言」まで、男性の衣装はどのように変遷してきたのか、まずはその歴史を概観することから始めよう。

チャールズ二世の父、英国王チャールズ一世(1600~1649)の肖像をご覧ください。

前回、ヘンリー八世やレスター伯ダドリーの服装で見たような衣服の基本シルエット、すなわち上半身はシャツの上にダブルレット、ボトムズはホーズという組み合わせは変わらない。ただ詰め物はぐつと減り、肩周辺のポリウムはむしろ袖の方へ下がり、なで肩のラインを作っている。首輪のごときラフは大きなレースの垂れ襟にとって代われ、なだらかな首から肩のラインを強調している。ホーズからも詰め物は減り、丈は少し長くな

っている。ストレッチの効かない素材に大きくストラッシュを入れて運動量を多くしたダブルレットからは、下に着た白いリネンのシャツがのぞいている。

同時代の騎士が登場するコスチュームものの映画、たとえば「三銃士」「仮面の男」「シラノ・ド・ベルジュラック」を観ると、ストラッシュが肘の前部と脇の後ろにのみ大きく入っている服が多い。少なくともこの2箇所に入っていれば、手は自由に剣を抜える運動量を確保できたものと推測される。チャールズ一世のこの装いも軍服ベース。V字型ウエストの下から垂れる部分は甲冑でいえば草摺(腰よろい)に相当する。

足もとに目を移そう。上部が逆さバケツのような形に折り返されたブーツが印象的であるが(しかも手袋とお揃いに見える素材)、実は室内でも着用されたこの逆さバケツつきブーツこそ、17世紀前半ヨーロッパ・メンズモードの最大の特徴といっている。同時代の童話作家、ペロの「長靴をはいた猫」(1696)の猫もおそらくこの逆さバケツのブーツをはいていた(?)。



チャールズ一世

かかと部分には拍車がついている(「拍車をかける」という慣用語の「拍車」とはこのこと。ずいぶん痛そうである)。ちなみに「金の拍車」は騎士の象徴であった。ブリーチズとブーツのすき間を埋めるために、カンズと呼ばれる装飾があらわれている。糊付けされたレースや、麻布にギザギザを入れたものを膝下に巻き、その上を靴下留めなどで留める装飾である、折り返しブーツ十ひらひらカンズを彷彿させる華麗な足元——ひよつとしたら今年の秋冬の女性の足元にお目見えするかもしれない。ミチヨ・イナバが秋冬コレクションで発表した、折り返しのできるフイラー・ブーツが、まさに17世紀メンズ・ブーツのシルエツで、これがセクシー系ファッションの女の子の間でもはやされそうな気がするの

「三銃士」ファッション

ある。顔にも注目したい。念入りに手入れされた口髭も、17世紀メンズには欠かせないファッションとなった。

「三銃士」や「シラノ」などでおなじみの騎士ファッションを作るには、ほぼこの基本型をベースに、「ブリーチズがより細く長くなったり、ダブルレットの裾線が水平になったり、サッシュを巻いたり」と若干の変化はあるが、羽根つきの帽子をななめにかぶり、マントを片方の肩だけにひっかけ、ダブルレットの下のボタンをはずして何気ない風に着こす。袖口とブーツの折り返しと襟元には、おそろいの大きなレース飾りをあしらえば完成。

こういうカジユアルな雲田気と粋とみなす美意識は、17世紀にはじめて主流になった。ただし、カジユアル・シックが許されるのはある階級以上の男であって、召使は「ボタンはずし」など許されなかった。偉い人ほどカジユアル度が高くなる、というのは、これ以降、現代までいたるところで見られる伝統となる(東京都庁でノーネクタイは現都知事だけらしい)。

前回にも触れたが、この時代はバロック全盛期である。現代に作られたコスプレ映画ではなかなか再現されにくい、立ち居振る舞いの基本には、バレエとフエンスで鍛えられたシムブルにして演劇的な動きが必須のマナーとして通底していた。レースやリボンや羽根飾りによる装飾は、口髭や拍車つきのブーツや何気なくボタンをはずす着こなし、というハードでカジユアルなディテールと絶妙なバランスをとって、バロックのアクションの効果を高めていたのではないかとと思う。「仮面の男」ですっかりディカプリオを食っていた中年の四銃士、なかでもガブリエル・バーンのアクションにはそういう緊張感をはらんだ気品を感じ

The Genealogy of the Stylish Charisma

られ、「実はダルタニヤンこそルイ14世の父親だった」というフィクションに、黄金の嘘としての説得力を与えていた。

ギャラントリ

さて、ペローの話からいつの間にか話がフランスに移ってしまつた。フランスついでに、この時代のファッションと連動した美意識のひとつ、ギャラントリのことを。

ギャラントリ (galanterie) すなわち「女性に気に入られるための雅の道」(ロワイヤル仏和辞典)。ギャラン (galant) な男、といえは、お洒落で立ち居振る舞いも垢抜けており、女性の扱いも心得ている色男、というイメージがある。

実は17世紀における、galantには「男のリボン装飾」の意味もあるのだ。

17世紀ヨーロッパ全土におけるメンズのみならずレディス・ファッションにも不可欠だったレース、実はかなり高価であった。

リボンはレースに比べて安価だったこともあり、各地で濫用されていた模様である。帽子にもカフスにもカノンスにも時にはふさふさと時にはさりげなくリボンを飾りたてた当時の王侯貴族や騎士の肖像がたくさん残されている。

リボンと騎士。となればおのずと手塚治虫の「リボンの騎士」を連想してしまうが、そういえばヒロインのサファイヤは17世紀的な帽子をなまめにかぶり、スラッシュ入りパフスリーブのコスチュームで白馬にまたがっていた。

話が飛びすぎたが、そういうわけで、リボンで飾りたてた男とはすなわちギャランな男であった。しかし、真のギャランな男が必ずしもみんなリボンで飾りたてていたわけではないのである。

黒ずくめの男



黒ずくめの男

黒ずくめの男

黒ずくめの男

ジャン・ポール・ラブノー監督版「シラノ・ド・ベルジュラック」には、シラノが「リボンも綾飾りも手袋もつけない田舎侍め」とののしられるシーンが出てくる。

リボンのようにひらひらしない、本物のギャラントリを心に抱くシラノ(扮するのはジェラルド・ドバルデュー)は、カッコばかりのその男に対して、「俺の飾りは心のなかだ。独立と誠実の羽根飾り、見よ、後光がさしているだろう」とやりこめる。観客から喝采が起るシーンである。

チャールズ二世の 衣服改革宣言前夜

話は再びイギリスに戻る。

今日にもアビールする端麗でシンプルなモダン・テイストを見せてくれた、生真面目で善良なクリスチャンだったチャールズ二世は、1649年、ピューリタン革命によって断頭台で処刑される。

その革命後、イギリス史において唯一の王権不在の時代、クロムウェル父子による共和制の時代が訪れるが、これが続いたのはたったの11年間。1660年には、チャールズ二世の息子、チャールズ二世が迎えられて王政が復古する。

「陽気な王様」とあだ名された二世のほうは父とは似ても似つかぬ性格で、公認された愛人が13人、認知した庶子が14人という、根っから明るい好色漢だったようだ(ちなみに故ダイアナ妃には、チャールズ二世と3人の愛妾の間に生まれた子女の血が四家系から流れている)。

このチャールズ二世の即位からしばらく、メンズ・ファッションのボトムズにはベチコート・ブリーチズ(フランスではラングラーヴ)なるものが登場する。

テル・ボルヒが描く「黒ずくめの男」(左上)をご覧いただきたい。帽子の円錐型とマントの円錐型、そして膝下のカノンスの円錐型がスタイリッシュにリフレインしているが、この男のはいっているベチコート・スカートのような半ズボンが、ベチコート・ブリーチズである。ピースの日記には、「片方の脚に両方の脚を入れてはいてしまい、しかも夜脱ぐときまでその誤りにまったく気付かなかった」男の話すらでてる。

この頃からフル・レングスのかつらも流行する。また、テル・ボルヒの絵の男は品よくまとまっているが、宮廷周辺の男たちの肖像を見ると、短くなったダブルレットの身頃や裾から、さらには袖口からも、シャツがあふれ出ており、そのうえ靴までリボンづくめなので、どうもだらしない印象を受けてしまう。

宮廷の放縦さがそのまま衣服のだらしないさ(カジジュアルな寛さとは違う)なっている、という感じ。

そして1665年にはベストが猛威をふるい、1666年にはロンドン大火と災禍が続く(このあたりの事情は、マikel・ホフマン監督の「恋の闇愛の光」をご参考に)。

災厄つづきは女道楽に耽溺する王様とその宮廷への天罰だという説も飛び出し、側近は、今こそ心機一転、メンズウエア改革の好機である、とチャールズ二世に進言(心を入れ替えた宮廷のイメージをわかりやすく衣装で示そうとしたのであろうか)。そこで

「黒ずくめの男」が出てきたわけである。

「黒ずくめの男」が出てきたわけである。

「黒ずくめの男」が出てきたわけである。

スーツのシステム、誕生

それでは、そこで採用された革命的な服とは何か。

宣言があった翌日10月8日のピースの日記には、「それはベストというものらしい。どういふものかはわからないが、貴族に儉約を教える服になる」旨が書かれている。

そして10月15日にチャールズ二世と側近は、実際に「新しい衣服」を着て登場するが、それはピースの表現によれば次のようなものだった。「身体の線に沿った、黒い司祭服のような丈の長いコートである。この黒地にピンク(穴あけ)が施されて下の白いシルクが覗いている。この服の上にコートをまとうている。ブリーチズの脚には、鳩の脚のような黒いリボン飾りがたっぷり施されている」。

コート下の「黒い司祭服のような丈の長いコート」、それがベストなのであった。ピースはこれを「ベルシア風のゆつたりした服」とも表現しているが、すなわち今日的な、あのベストとは似ても似つかぬ、丈の長い袖つきの服なのである(もともと「ベスト」には「衣服一般」の意もある)。

現代のベスト(ウエストコート)のルーツを感じさせるのはその背中である。前面にはシルク・ブロードの重厚な生地、豪華な刺繍がほどこしてあるのだが、外からは見えない袖と背中には、薄くてべらべらな安価な生地でお茶を濁しているのである。つまり、「貴族に儉約を教える服云々」というのは、見せるべき前面だけ豪華にして、背中や袖には安価な生地を使用せよ、そうすることで浮いたお金を節約せよ、ということだったわけである。男性のベスト姿の背中にそこはかとなく漂う、あの半端な貧乏感、こ

ういう起源に由来していたのである。スーツの専門家によれば、あのべらべらの生地には、上にはおるジャケットとの摩擦を少なくして、重ね着によるもたつきを防いでくれるメリットがあるのだという。それも一理あるが、やはり半端にせこいという印象はぬぐいきれるものではない。

イギリスに対抗意識をもやすフランスのルイ十四世は、このベストを召服用のお仕着せにするなどの抵抗を試みるが、結局、チャールズ二世のベスト宣言の4年後には、ヨーロッパ中の貴族の着こなすにベストが定着することになった。

ただし、本来の「節約」の意義はどこ吹く風、ベストはあらゆる男性服のなかでも最も装飾的なパーツとして生き残ることになるのである。

このベストの上に、コートが上着として着用され、ベストはきちんとボタン留めして、前ボタンを開けたコートから覗かせる、という装い方の歴史が幕をあげることになる。コートが正式な室内着としての上着として着られるようになるのも、この頃の話である。独立したタイ(クラブット)が用いられるに及んで、今日的なスーツの基本的構成要素——シャツ十タイ十ベスト十上着十二股に別れたボトムズという構成が完成するわけである。この服装がスーツの元祖と位置付けられることがあるのは、そういう構成上の理由による。それぞれの形もシルエツとも今日とは全然違う。ズボンも膝丈だし、上着も膝丈で、襟もまだついていない。しかし、この衣服のシステムが、ともかくにも200年以上続いた「ダブルレット&ホーズ」の時代に決別を告げる革命的なシステムになったのである。

以降、西洋のメンズ・ファッションの歴史は、この基本システムを洗練していく方向で展開される。

以降、西洋のメンズ・ファッションの歴史は、この基本システムを洗練していく方向で展開される。

以降、西洋のメンズ・ファッションの歴史は、この基本システムを洗練していく方向で展開される。

以降、西洋のメンズ・ファッションの歴史は、この基本システムを洗練していく方向で展開される。